本田　伸著
『シリーズ藩物語　弘前藩』

福井　敏隆

本書は、本会会員である本田伸氏（青森県立郷土館主任研究主査）が、弘前藩について書き下ろしたものである。出版元の現代書館では江戸末期の二七〇藩について刊行を計画しているようで、本県関係では、他に八戸藩、七戸藩、黒石藩も名前があがっている。

まず、本書の構成を見てみよう。

プロローグ　弘前藩物語
第一章　弘前藩の誕生
1　津軽家の独立
2　領域の確定と初期の藩政
3　名君信政と中期藩政
第二章　弘前藩の領内支配
1　家臣団構成と藩士
2　弘前城と城下町の形成
3　弘前藩を支えた人々
第三章　弘前藩の文化と人物
1　個性あふれる文化の諸相
第四章　津軽に生きる人々
1　領内の統制
2　都市の生活・村の生活
3　民衆の移動と交流
第五章　後期藩政と北方警備
1　宝暦改革と学問・芸術
2　家格上昇と黒石藩の成立
3　藩政改革と幕末維新
エピローグ　新たな地域像を求めて

弘前藩に関する通史としては、本会会長長谷川成一氏が執筆した『日本歴史叢書㊸　弘前藩』（吉川弘文館　二〇〇四年三月刊）をあげることができる。同書は青森県史・新編弘前市史・新青森市史の編纂事業等の最新成果を生かし、弘前藩政を政治社会上の変化で六期に区分して詳述したものである。本田氏は長谷川氏の著書を意識され、本書では弘前藩政の流れを踏まえながら、一般読者向けにエピソードを中心に弘前藩についての啓蒙書として書いておられるようである。「あとがき」で、「歴史の流れを常に意識し、単なるエピソード集にならないようにした」「典拠は出来るだけ明らかにし、歴史資料に即した記述になるよう心がけた」と記している。第一章と第五章は政治の流れを重視した記述になっているが、他の章ではこの方針は貫かれているように感じられた。同名の書が先に刊行されているだけに執筆に際しては苦心されたものと推察される。

本書の構成上の特徴として、本文の下に内容に即した写真の掲載が多

数見られ、読者の理解を助けている点をあげなければならない。絵図の写真が多いのは大変助かる。また、本文中に出てくる難しいと思われる歴史用語については、同じく本文の下に注記があり、便利である。他藩の記述の場合もこうなのかは評者はわからないが、興味を持って読んでくれる読者にとっては大いに役立つことであろう。煩雑さをいとわずにこのような配慮をしている現代書館の編集方針にも敬意を表したい。

内容的には、長谷川氏の著書と同じく青森県史・新編弘前市史・新青森市史の編纂事業等の成果が大いに反映されている。読者にとっては初めて知ったことも多いものと思われる。紙幅の関係で主なものしか指摘出来ないが、左に列挙する。

豊臣政権下での文禄・慶長の役への藩祖津軽為信の参陣についての記述（「肥前名護屋に在陣」）。

「津軽屏風」の分析から為信の関ヶ原の戦いへの参陣についての記述と写真（「証明された関ヶ原参陣」）。

川越石太郎が幕末に筆写した「士心得之雑記」からみた弘前藩士の精神生活の記述（「武家の精神生活」）。

天変地異からみた城下の民衆の動揺を物語る「弘前に津波が来るという流言」の記述（「津波を恐れる人々」）。

※なお、この項の最後に、平尾魯僊が自著「幽府新論」の刊行を計画し、平田延胤（銕胤の子）に評論を依頼したところ、「日食・月食」を凶事がある天の戒めとした記述を、そうではないので、この部分は再考した方がよいというアバイスをもらっており、国学の保守的な学問というイメージを見直す記述があるのは、注目に値する。

石田三成の子孫が弘前藩に代々仕えた事実（「石田三成の系譜」）。

津軽に残る魅力あふれる仏像群を論じた記述（「西・北津軽のほとけたち」）。

成分に阿片やオットセイを含む弘前藩の秘薬「一粒金丹」についての記述（「評判取った一粒金丹」）。

民衆の蝦夷地との交流を物語る記述や民衆が持ち帰った蝦夷錦の写真（「松前稼ぎ」や「蝦夷錦が来た道」）。

乳井貢の実施した宝暦の改革で使用された標符についての記述と写真（「標符の発行と乳井失脚」）。

天明の大飢饉で青森騒動を引き起こした主役落合千左衛門（または文左衛門）の墓の写真（「天明飢饉と青森騒動」）。

津軽の国学者と平田篤胤家（銕胤が当主）が、今で言う通信教育で結びついていたことを論じた記述（「平尾魯僊と鶴舎有節」）。

これらの内容は、今までの通史では語られる事がなかったことが多く、本書がそれらを広く周知させてくれた事は「弘前藩」についての理解に多大な貢献をした事になるものといえよう。

最後に、読んでみていくつか気になった点があったのでそれを指摘したい。四一頁に「（野本）道元が信政に仕えたのは、山鹿素行の勧めによる」とあるのは、時間的に無理があるように思われる。素行の没年は貞享二年（一六八五）で、道元の弘前藩召し抱えは元禄六年（一六九三）。八年の開きがある。道元は浅野家に仕えていたようだが、「素行日記」からは素行と道元の間に行き来があったことは読み取れない。

七六頁に「満天姫は信枚との間に一男（黒石津軽家の祖信英（のぶふさ））一女を

儲けたが」とあるが、信英は二代藩主信枚と側室法蓮院との間に生まれており、満天姫が信英の嫡母となったことによる、本田氏の勘違いであろう。

七八頁に「信明の養母妙詮院の姪に当たる」とあるのは、「貞寿院」の間違いである。七代藩主信寧の正室章姫（貞寿院）は川越藩主松平明矩の娘、八代藩主信明の正室喜佐姫（瑶池院）も川越藩主松平朝矩の娘で、叔母と姪の間柄になる。信明は信寧の側室歌木（妙詮院）の子であり、世継ぎとなった時点で、正室貞寿院の養いとなったのである。

一二二頁に石場家住宅（重要文化財）を「江戸中期に建てられたもので、のち現在地に移転した」とあるが、どこから移転したのか記述がない。石場家は移転して現在地に建て直されたものだろうか。

一七三頁に「表口四〇〇間、奥行一五〇間の建物が、八月中にできあがった」とあるが、これは『松前詰合日記』の読み間違いであろう。文化四年（一八〇七）のエトロフ事件により弘前藩が蝦夷地警備のため、北海道斜里町で越冬し多数の死者を出したことは有名である。このとき三六坪の上長屋、三〇坪の中長屋と下長屋などを建てている。「表口四〇〇間、奥行一五〇間」はこれらの建物を建てた敷地の広さである。

細かいところでいくつか勘違いや間違いはあるものの、本書は「弘前藩」を学ぶテキストとして多くの人々に読んで頂きたい書であると思う。評者の方にも勘違いや間違いがあるかもしれない。ご寛恕を願えれば幸いである。

（A5判、現代書館出版、二〇〇八年七月刊、一六〇〇円＋税）

（ふくい・としたか　青森県立弘前南高等学校教諭）

八戸市史編纂委員会編
『新編八戸市史　近現代資料編Ⅱ』

竹村　俊哉

本書は、近代化の基盤作りがおこなわれた明治期における八戸地域のくらしや生活、地域産業、政治、社会資本、教育等の分野の諸様相を紹介した『新編八戸市史近現代資料編Ⅰ』（二〇〇七年）の続編で、明治末期から昭和初期にかけての八戸地域に関わる史資料を収録したものである。本書の構成は以下の通りである。

第一章　大正期の生活
概説　凶作と大火、二大災難をたくましく乗り越える
第一節　凶作
第二節　八戸大火
第三節　人々の生活の変化
第四節　祭りと観光振興
トピックス　八戸大火と人々～松友会誌から見る大火の復興
第二章　文化の興隆と実業教育の進展
概説　北方日本の小さな町で生まれた独創的な雑誌『東北実業評論』と社会教育
第一節　明治から大正への文化活動の動き
第二節　教育の拡充